

2012年12月15日

早稲田大学中央ユーラシア歴史文化研究所

「モンゴル帝国継承国家論の再検討」第2回研究会

「近代モンゴルにおける『モンゴル史』の構築」報告

モンゴル人民党におけるモンゴル帝国史

青木 雅浩

(早稲田大学中央ユーラシア歴史文化研究所 招聘研究員)

はじめに

1910年代末の外モンゴル自治運動で1920年夏にモンゴル人民党（以下「人民党」）が結成され、1921年7月にモンゴル人民政府（以下「人民政府」）が成立した。人民党、人民政府の活動に関しては近年研究が飛躍的に進展したが、不明な問題も多く残っている。人民党、人民政府におけるモンゴル帝国史の位置づけも、その1つであろう。近年の研究で、人民党、人民政府関係史料中のモンゴル帝国関係記述が少しずつ明らかになりつつある¹が、全容解明には遠い。

本報告では、1920年代前半の人民党、人民政府の政治の場において、モンゴル帝国関係記述がどう用いられたかを検討し、当時の外モンゴル政治におけるモンゴル帝国関係記述の意義を解明することを試みる。そのため、まず、人民党、人民政府の政治の場において、モンゴル帝国関係記述がどう登場したかをとり上げる。次に、モンゴル帝国関係記述がどんな意図に基づいて用いられているかを考察する。なお、本報告は、1920年代前半の外モンゴルにおけるモンゴル帝国史の内容がどうであり、どんな歴史研究が行われたかについて論じるものではない。

I. 外モンゴル政治におけるモンゴル帝国史関係記述

1. 『モンゴリン・ウネン』におけるモンゴル帝国

○モンゴル人民党の成立

1911年：モンゴル独立運動　ボグド・ハーン政権成立

1915年：キャフタ三国協定→外モンゴル自治政府成立

1919年11月：外モンゴル自治廃止→外モンゴル自治復興運動

¹ 例えば、二木2000は文書館調査を通じて『モンゴリン・ウネン』の原文を解明した。

ボド²のグループ、S.ダンザン³のグループ→1920年夏：人民党結成
ソヴィエト・ロシア⁴に7人の代表派遣

→ロシア共産党中央委員会シベリア局東方諸民族部（1921年～：コミンテルン極東書記局）が受け入れ

○『モンゴリン・ウネン』

1920年秋－1921年春発行：人民党宣伝のための新聞

（史料1）「モンゴル国の発展」（『モンゴリン・ウネン』no.1：1920年11月10日）

モンゴル族はかつて偉大なる大国であったが、様々な理由によって弱体化して分散し、他国の支配下に入った⁵。

論説概要：強力だったモンゴル人が、他国支配下に入って弱体化したが、外モンゴル自治政府の支配者、王公らは自らの権力のみを考えていた

（史料2）「モンゴルの新人民政治を建設するための基本原則」（『モンゴリン・ウネン』no.3：1920年12月20日）

モンゴル国には、数百年間世襲制ザサグがおり、チンギス・ハーンの血筋であったが、愚鈍で悪しき者に支配されてしまった。彼らは、大モンゴル国家を解体し、モンゴル大衆を漢人、満洲人、ロシア人、チベット人の奴隷としてしまい、かつての偉大で完全なる大モンゴル国を、世界で最低で貧しく無知蒙昧な国にしてしまった。

大賢チンギス・ハーンは、大衆及び政治の事に対して、世襲制ザサグでは道理に合わず不適切で欠陥があることをよく知っていた。そのため、自らの遺訓として以下の事を指示した。これ以後、長たるザサグ達は、モンゴル族の大衆と兵士の大会議で選出して立てるように、と。この言葉の通り、当初、モンゴルのハーンであるウゲデイ、グユクをはじめとする者達は、この会議で選出され立てられていた。だが、後にチンギスの賢明なる勅令は忘れられ、モンゴル国家は、トゴンテムルという者のような愚鈍な者達が支配するようになった⁶。

論説概要：世襲制王公政治批判、民主的に選出された者達による政治の必要性

² 人民党のリーダーの1人。人民政府では首相と外務相を兼任したが、外モンゴルにおけるソヴィエト・ロシア、コミンテルンの活動に反感を抱いたために政府から追われ、粛清された。

³ 人民党のリーダーの1人。人民政府では財務相、全軍司令官を歴任するが、A.Γ.スタルコフと組んでリンチノと対立したことによって、1924年夏に粛清された。

⁴ 本報告では、ロシアにおけるソヴィエト政権に関して、1922年末のソ連成立以降については「ソ連」、それ以前のロシア・ソヴィエト連邦社会主義共和国については「ソヴィエト・ロシア」、双方を総合して称する際には便宜上「ソヴィエト」と表記する。

⁵ Үнэн р.14, НБТ Ф.1-Д.1-ХН.36-no.1.

⁶ Үнэн р.38（但し第1段落のみ）、НБТ Ф.1-Д.1-ХН.36-no.3.

(史料3)「モンゴル国の新たな人民権力の中央及び地方政府の様相」(『モンゴリン・ウネン』no.4 : 1921年3月5日)

国の選出された代表達の空席をその者の息子や近親に生まれた者が世襲するのではなく、チンギス・ハーンの時代に選挙で選んで就かせたように、大モンゴル国の代表達の大会議で選出され就任させる⁷。

論説概要：世襲制王公政治批判、民主代表制政治を中央、地方で実行する方法

(史料4)「人民党の多くの同志兄弟達に聞かせること」(『モンゴリン・ウネン』no.6 : 1921年4月19日)

…ただチンギス・ボグドの時代以降について述べると、当時、チンギス・ボグドは、世界中に大名を轟かせ、四方のいくつもの小国を滅ぼし、一大国を確立した。査するに、チンギス・ボグドは多くの者に寛容で庇護を示し、苦楽を大衆と共に享受し、貴賤に分けて威を示すようなことはせず、大衆と心を一にしてようやく、このような一大国を創り上げたのである。ただチンギス・ボグドは1人の人間であり、いくら大いに賢く有能で威勇あっても、どうして1人で1国の国事を決められよう。これは、大衆の心を寛容によって把握したために成ったことではないのか。後に世襲制の王公達が現れ、全権力が王公の手に入り、自らの身を護法尊の如く見なし、大衆を犬馬と同様に奴隷として軽視してきた。そのため、大衆の心が離れつつ、国を滅ぼされた⁸。

論説概要：筆者＝「ハラチン・モンゴルのエリンチン」

王公、人民間で身分、権力に差がある現状を批判、人民による権力奪回

(史料5)「モンゴル人民党中央委員会文書。ロシア白党のバロン・ウンゲルン軍中のモンゴル兵達兄弟に聞かせること」(『モンゴリン・ウネン』no.6 : 1921年4月19日)

古文書を見るに、我らモンゴルの昔の祖先、チンギス・ハーンとフビライ・セツェン・ハーンの時代に、世界に我らモンゴルと同等の勇氣と力を持つ者はなく、二つと無く偉大な力を持っており、威名を轟かせ、栄光に輝いていた。当時以降、外国によって我らモンゴルの以前から受け継がれてきた風習を軽視し抑圧するようなことは全くなかった。だが、後に我らモンゴルの国家内にいくらかの混乱が起き、互いに友好を損なっていると、南の漢人と当時強力であった満洲族の国の両者が力を合わせて攻撃してきた。そして、モンゴルの国家を滅ぼし、我らを抑圧する様々な悪知恵を考案する等によって、大衆に様々なひどい苦しみを経験させ、モンゴル人の血を河海のように流させた。このようなことは、数えてみても、簡単には数え終わらないほどである⁹。

⁷ Үнэн р.58. 「チンギス・ハーンの時代に選挙で選んで就かせたように」の部分、二木 2000 p.26, НБТ Ф.1-Д.1-ХН.36-но.4.

⁸ 二木 2000 p.37, НБТ Ф.1-Д.1-ХН.36-но.6.

⁹ Үнэн р.87. 「主チンギス・ハーンとフビライ・セツェン・ハーンの時代に、世界に我らモンゴルと同等の勇氣と力を持つ者はなく、二つと無く偉大な力を持っており」の部分、二木 2000 p.25, НБТ Ф.1-Д.1-ХН.36-но.6.

1920 年秋：ロシア白軍の将軍バロン・ウンゲルンの外モンゴル進入

1921 年 2 月：外モンゴル自治政府再興←モンゴル人の協力

ソヴィエト・ロシア、コミンテルンの視点：外モンゴルのロシア白軍基地化

→人民党援助推進

論説概要：ウンゲルン軍内のモンゴル人に、ウンゲルンに協力せず、モンゴル人民臨時政府に協力するよう主張

○人民政府の成立

1921 年 3 月 1-3 日：人民党組織会議（人民党第 1 回大会）

3 月 13 日：モンゴル人民臨時政府成立

6 月末：ソヴィエト赤軍、極東共和国軍、人民義勇軍、フレーへ進軍

1921 年 7 月 10 日：モンゴル人民政府成立

2. 全モンゴル統一呼びかけ文書

1921 年 10 月 17 日付人民政府内務省発全モンゴル統一呼びかけ文書

文書概要：人民政府内務省→外務省等 4 省、人民党中央委員会宛

10 月 5 日付内務省作成文書をボグド・ハーンに上奏→承認→各省に伝達

「外モンゴル以外のモンゴル人は漢化、ロシア化したため、元来のモンゴルが残る外モンゴルにまとまるべき」

（史料 6）全モンゴル統一呼びかけ文書（1921 年 10 月 17 日付：人民政府内務省発）

査するに、我らモンゴル人が根源とする昔の父祖たるチンギスの時代から、多くの氏族の人々が 1 つに集まり、モンゴルという部族となり、アジア大陸の寒冷地帯の大半を支配して生活していた。だが、年月が過ぎた後、互いに考えていることが月日ごとに変わりつつ、中国、ロシアの一部として所有され、部分部分に分けられ、支配されていた…¹⁰

3. モンゴル人民党第 2 回大会

○ボドーの粛清事件（1922 年 1-8 月）

A. Я. オフチン¹¹：王公、仏教勢力有力者の中に「親中反ソ」勢力存在

→人民党をソヴィエト・ロシアの力で組織として確立する方針

現実の対策：反ソ、反人民政府的傾向が残る現状の安定化

→王公、仏教勢力の有力者を閣僚に就けた新政権

=人民党と王公、仏教勢力の「連立政権」¹²

「連立政権」に対するモンゴル人指導層の姿勢：肯定

ソヴィエト、コミンテルン：1923 年に「連立政権」の是正へ

→人民党の組織的確立、政権からの王公、仏教勢力排除、

人民党による国家統治体制構築

¹⁰ ГХТА Ф.1-III.17.

¹¹ モンゴル駐在ソヴィエト・ロシア外務人民委員部副代表。

¹² 青木 2011 pp.107-160.

○モンゴル人民党第2回大会

A. Г. スタルコフ¹³: 方針実現のために党大会開催⇨モンゴル人指導層は党大会望まず
1923年7月18日－8月10日: モンゴル人民党第2回大会(初の党大会¹⁴)

(史料7) 政府を代表するS.ダンザンの祝辞(1923年7月18日人民党第2回大会第1回会議)

我らモンゴルは以前強力になっていたが、後になって次第に弱体化しつつ、国内外の抑圧を受けた。現在、ロシアから援助を受け、人民が権力を持つ政府を建設し、様々なことを良く指導し、今、党第1回大会を開催した…¹⁵

(史料8) ツェレンドルジ¹⁶の政府報告(1923年7月20日人民党第2回大会第2回会議)

1.我らの昔のボグド・ハーン・チンギスの時代には、大小の政治のあらゆる事柄を、多くの者が会議を開催して協議を行い、過半数の方の考えを以て決議していた。これによって、多くの者の心を掴み、極めて強力な大国になったのである。全世界の大小の多くの国々は、昔の無知蒙昧であった時代には、専制政治を長年行っていた。そのため、大衆に極めて重大な困苦を経験させ、国家までもが滅ぶに至ることが多く発生した。そのため、後に次第に大衆の大革命が発生し、専制政治を倒し、人民主権の制限政治、あるいは共和制を行ったことによって、富裕で強力な国になった。…我らモンゴルの以前の自治政府は、同様に専制君主政治を行い、内外の大小の様々なことを全て内務等5省がそれぞれ自分の好き勝手に専制的に行っていた…。…我らモンゴルの黄教の主ボグド・ハーンと…人民党の同志は、内外の過去現在の状況に鑑み、上と下、王公と大衆、貧と富などと少しも差別せず、皆心を一にして力を合わせて努力し、国家の基を確固たるものとし、宗教、民族を永遠に堅固にして守ることを最上の主目的とした…¹⁷

4. モンゴル人民共和国第1回国会におけるモンゴル帝国史関係発言

○1924年夏の政変

人民党第2回大会強硬開催→リンチノ¹⁸の強い反発
→リンチノとスタルコフの対立発生

¹³ ソリグトというモンゴル名も持つ。モンゴル駐在共産主義青年インターナショナル代表として、モンゴル革命青年同盟結成等に関わり、オフチンの後を継いで外モンゴルにおけるソ連、コミンテルンの活動を指導するようになった。

¹⁴ 青木 2011 pp.201-223. 1924年夏のモンゴル人民党第3回大会(当時の認識では第2回大会)において、1921年3月1-3日に行われた人民党の組織会議をモンゴル人民党第1回大会としたため、それ以降の党大会は1つずつ繰り下げられることになった。本報告では、1923年に行われた党大会を第2回大会、1924年夏に行われた党大会を第3回大会と表記する。

¹⁵ НБТ Ф.2-Д.2-ХН.1-Х.6. H2X p.14にもダンザンの祝辞が掲載されているが、「以前は強力になっていたが」の部分が省略されている。

¹⁶ ボグド・ハーン政権時代から、外務において活躍し、人民政府でも外務相、首相を歴任した外モンゴルの重要な政治家。

¹⁷ НБТ Ф.2-Д.2-ХН.1-Х.40. H2X p.29にもこの記述が掲載されているが、冒頭のチンギスに関する部分が省略されている。なお、この報告の一部は、1928年に刊行された『モンゴル人民革命党史関係資料集』内のゲレグセンゲ執筆「党第2回大会について」にも掲載された(NTQZ pp.173-174, HTX3 pp.111-112)。

¹⁸ エルベグドルジ・リンチノ。東方諸民族部モンゴル・チベット課メンバー、極東書記局モンゴル・チベット課課長として人民党に早くから関わったブリヤート・モンゴル人活動家。人民政府では全軍評議会議長、政府顧問を務めた。

人民党第3回大会(1924年8-9月)、モンゴル革命青年同盟第3回大会(同9-10月)
→スタルコフ派敗北：S. ダンザンら肅清¹⁹

○ルイスクロフと第1回国会

1924年秋：モンゴル駐在コミンテルン代表T. ルイスクロフ²⁰の派遣
→ルイスクロフの活動目的=スタルコフの活動目的：「連立政権」解体
政権からの王公、仏教勢力の排除、人民党による国家統治体制構築
→国会開催を重視

1924年11月8-28日：モンゴル人民共和国第1回国会開催
→モンゴル人民共和国の成立²¹

(史料9) ツェレンドルジの祝辞(モンゴル人民共和国第1回国会第1回会議：1924年11月8日)

ある典籍の述べるところによれば、今から700年前、我らモンゴルの中からチンギスという1人の勇敢で素晴らしく栄光あるハーンが現れ、全世界の3分の2までを支配した。元来、政治のあらゆる特別で重要な事柄全てを皆で会議を開いて協議し、過半数の考えを以て決議していた。そして、多くの者の心を満たして従わせ、このような古今にない驚くべき強力な大国を築くことができた。ただ、それ以後の世のハーン達が以前の賢明なハーン達の行った輝かしき道を捻じ曲げ、次第に専制的性格を持つようになった。そして、556年前、この先祖たちの遺した元朝を漢人に奪われたのみならず、我らモンゴル大衆の大半が漢人に殺戮され滅ぼされ、残った者達の一部が仕方なく漢人の支配下に入ったのだと言う。そして、我らハルハ等の地のモンゴル人は…240年前、1世ジェブツンダムバ・ホトクトに従って清朝皇帝に帰順したのだと言う。それ以後200年以上、専制政治の下に粗野で蒙昧なやり方で圧政を受け、専制的な王公、仏教僧達に奴隷として抑圧され、様々に搾取されて害を受ける等の困苦を経験しつつ耐え難くなっていた…²²

Ⅱ. 1920年代前半の外モンゴル政治におけるモンゴル帝国史記述の利用

1. チンギス・ハーン時代に対する肯定的評価

史料1-9：チンギス・ハーン時代を肯定的に表現

→人民党、人民政府のハルハ・モンゴル、ブリヤート・モンゴルの政治家等はチンギス・ハーン時代を肯定的に捉えていた

モンゴル人指導層がチンギス・ハーンを活動の中心的シンボルとした？

→モンゴル帝国関係記述極少

¹⁹ 青木 2011 pp.223-242, 255-294.

²⁰ カザフ人。ムスリム・コミュニストとしてトルキスタンにおける活動に従事した後、1924年頃からコミンテルンの活動に関わるようになり、1924年秋にモンゴル駐在コミンテルン代表として派遣された。

²¹ 青木 2011 pp.295-340.

²² Цэрэндорж р.8.

2. 王公批判、民主制礼賛のためのモンゴル帝国関係記述

○2つの主張

A. 「清代以降のモンゴル社会批判のためのモンゴル帝国礼賛」

史料 1、2、4、5、6、7、8、9

→チンギス・ハーン時代にはよい政治。その後衰退、他国支配、王公の専制的支配

↓

王公の専制的支配、外国支配批判のため、「モンゴル帝国時代の社会はよかった」と言うためにモンゴル帝国記述を利用

B. 「民主制肯定のためのモンゴル帝国礼賛」

史料 2、3、4、8、9

→モンゴル帝国時代はクリルタイで皆の意見を汲んで問題決定するよい社会

史料 2、4、8、9：A 主張も反映

→皆の意見を汲むチンギス・ハーン時代のよい社会が、王公が専制支配する悪い社会に

○史料 1-9 の作成者

史料 6：人民政府内務省 史料 7：S.ダンザン 史料 8、9：ツェレンドルジ

史料 1-5：『モンゴリン・ウネン』執筆者

→1-3号：東方諸民族部、4-6号：極東書記局のモンゴル・チベット課編集²³

第1号の一部：S.ダンザンの関与 第6号：ボヤンネメフ²⁴の関与

大半：リンチノ等ブリヤート・モンゴル人の関与²⁵

*この形式の記述は以後も継続：ダムバドルジ²⁶、ジャダムバ²⁷ら

3. モンゴル帝国関係記述に対するソヴィエト、コミンテルンの姿勢

○ソヴィエト、コミンテルンの関与

『モンゴリン・ウネン』（史料 1-5）、人民党第2回大会報告（史料 7、8）、
モンゴル人民共和国第1回国会祝辞（史料 9）

²³ 二木 2000 pp.19-20, НБТ Ф.1-Д.1-ХН.36.

²⁴ 外モンゴルの青年活動家。早くから人民党の活動に関与し、人民政府成立後はモンゴル革命青年同盟の発足に努め、その中心的メンバーとして活動した。また、作家としても秀でた活動を行った。

²⁵ 二木 2000 pp.26-29.

²⁶ 人民党に早くから関わった人物。人民党中央委員会委員長を務め、ペトログラードにも留学した。ダムバドルジは『人民の権利』No.49（1924年）掲載の論説「専制思想を政権から切り離す」で、昔は強力だったモンゴル人が次第に弱くなって満洲・漢人に支配され、大衆は権力者の奴隷となった、と記している（Дамбадорж p.208）。

²⁷ 人民政府で外務省通訳官、財務省副大臣、モスクワ駐在全権代表部参事官等を務めた人物。ジャダムバは、1928年に刊行された『モンゴル人民革命党史関係資料集』の前文の冒頭に、モンゴルはかつて強力だったが弱体化し、内外の専制主義者に抑圧されたことを記している（NTQZ p.1, HTX3 p.24）。

○『モンゴリン・ウネン』の編集過程

1921年3月19日付リンチノ発C.C. ポリソフ²⁸宛電報

→『モンゴリン・ウネン』の内容が人民党に適切で大衆の世論に適っているかを人民党中央委員会に尋ねよ²⁹

↓

イルクーツクで人民党員が無関係な中で編集、内容について人民党に照会

→東方諸民族部、極東書記局が主として編集

*ソヴィエト・ロシア、コミンテルンの検閲後もモンゴル帝国関係記述

→1920年代前半にはソヴィエト・ロシア、コミンテルンはモンゴル帝国を政治宣伝に用いることをタブー視せず

○人民党第2回大会関係史料（史料7、8）

人民党第2回大会：スタルコフがイニシアチヴを發揮して開催

*大会準備特別委員会の組織：会議報告、決議案、新中央委員会メンバー決定

・スタルコフが参加する人民党第2回大会開催特別委員会³⁰

1923年7月19日の特別委員会会議：祝辞担当一覧、祝辞の長さ規定³¹

→史料7：特別委員会管理下に作成

1923年6月7日の特別委員会会議

→「人民政府成立以降、国家が大衆にとって助けとなることをどれほど達成して政治を行ってきたか」を報告するため、報告作成をツェレンドルジに委任³²

↓

1923年6月30日の特別委員会会議：ツェレンドルジ作成報告案協議

→政府のあり方、地方行政、財政等政府の活動について、人民政府建設前の状況と人民政府建設後の状況を比較して記述するよう修正指示³³

↓

ツェレンドルジの人民政府報告（史料8）完成

→報告の本質：外モンゴル自治政府の活動を批判、人民政府の活動を称賛

→外モンゴル自治政府を貶めるため「チンギス・ハーンの時代はよかった」

*スタルコフの党大会開催目的：政権からの王公、仏教勢力の排除

→人民政府報告で王公、仏教勢力が関わる外モンゴル自治政府を批判

そのための道具としてのモンゴル帝国関係記述

²⁸ モンゴル駐在コミンテルン極東書記局代表を務めていた人物。

²⁹ АВПРФ Ф.0111-ОП.2-ПАП.103-Д.28-Л.113.

³⁰ 青木 2011 pp.210-215.

³¹ НБТ Ф.2-Д.2-ХН.4-Х.24.

³² 青木 2011 p.213, НБТ Ф.2-Д.2-ХН.4-ХХ.6-7.

³³ 青木 2011 p.246, Н2Х pp.152-153, НБТ Ф.2-Д.2-ХН.4-ХХ.16-17.

スタルコフはモンゴル帝国関係記述を出すよう指示せず
→ツェレンドルジが敢えて記述した可能性→スタルコフはこれを許容

○モンゴル人民共和国第1回国会関係史料（史料9）

第1回国会：ルイスクロフが開催を急がせる

ルイスクロフの国会に関する報告³⁴：ツェレンドルジの祝辞（史料9）に言及せず

↓

ツェレンドルジの人民政府報告に対する言及

→外モンゴル自治政府下でモンゴル人が獲得したものと人民政府下で獲得したものを比較、ソ連援助下で行われたことの重要性が説かれたこと＝報告の本質³⁵

↓

ツェレンドルジの祝辞（史料9）：これと同様の内容

→ルイスクロフの上述の意図の影響の下に作成され、ツェレンドルジがチンギス・ハーンの記述を含めた可能性

*清代、外モンゴル自治政府時代の王公批判を行うために、ソヴィエト、コミンテルンは、モンゴル帝国関係記述が公に政治の場で見られることを許容。史料1-9は、単なるモンゴル人の主張ではなく、ソヴィエト、コミンテルンの影響が含まれていることを考慮すべき。

*ソヴィエト、コミンテルン無関係の史料6＝王公批判、民主制礼賛と無関係

おわりに

1920年代前半の外モンゴルの政治の場において、モンゴル帝国関係記述は僅かながら登場する。これら記述は、人民党、人民政府に関わるモンゴル人がチンギス・ハーン信奉を有し、モンゴル帝国継承国家を建設しようとしたことを示すものというよりも、モンゴル帝国以後の世襲制王公批判のための道具として用いられたものであった。この点に関してはソヴィエト、コミンテルンが関与していた。ソヴィエト、コミンテルンは、政権からの王公、仏教勢力の排除のために、モンゴル人がモンゴル帝国関係記述を政治の場で公に持ち出すことを了承していた。

本発表で挙げたモンゴル帝国関係記述は、1920年代前半の外モンゴルの政治情勢で大きな意義を持った「連立政権」の問題に関わる王公、仏教勢力への批判に深く関わっている。一見、思想的主張にのみ見えるモンゴル帝国関係記述は、実は当時の政治情勢に対してより重要であった。

³⁴ РГАСПИ Ф.495-ОП.152-Д.24-ЛЛ.115-238.この報告は1924年12月15日付で作成され、コミンテルン東方局局长 Ф.Ф.Петров宛に送られた。

³⁵ 青木 2011 pp.325-326, РГАСПИ Ф.495-ОП.152-Д.24-Л.122.

○文書館史料

ГХТА: モンゴル国立外務中央文書館所蔵史料

НБТ: モンゴル人民党史料センター（旧モンゴル人民革命党中央文書館）所蔵史料

АВПРФ: ロシア連邦外交政策文書館所蔵史料

РГАСПИ: ロシア国立社会政治史文書館所蔵史料

○史料集

Дамбадорж: Х. Магсаржав. эмхт. *Цэрэн-Очирын Дамбадорж*. Улаанбаатар. 2005.

Н2Х: МАХН-ын төв хорооны дэргэдэх намын түүхийн институт. *Монгол ардын намын хоёрдугаар их хурал*. Улаанбаатар. 1974.

НТХЗ: Г. Дашням, Ц. Гантуяа, На. Сүхбаатар, хэв.бэл. *Монгол ардын хувьсгалт намын түүхэнд холбогдол бүхий зүйлүүд*. Улаанбаатар. 2004.

Үнэн: Д. Даш эмхт. *Монголын Үнэн сонин*. Улаанбаатар. 1971.

Цэрэндорж: Х. Магсаржав, О. Батсайхан эмхт. *Ерөнхий сайд Б. Цэрэндорж. 1868-1928*. Улаанбаатар. 1998.

NTQZ: *mongyul arad-un qubisqaltu nam-un töb qorigy_a. mongyul arad-un qubisqaltu nam-un teüke-dür qolbuydal бүкүү □үүл-үүд. улаанбагатур*. 1928.

○参考文献

青木 2011: 青木雅浩、『モンゴル近現代史：1921—1924年—外モンゴルとソヴィエト、コミンテルン』、早稲田大学出版部、2011.

二木 2000: 二木博史、『『モンゴリーン=ウネン』紙の内容の再検討』、『東京外国語大学論集』60、2000.